トイウの談話語用論的役割

文芸言語研究科言語学専攻５年次休学中
スロベニア共和国リュブリャーナ大学外国人講師　守　時　なぎさ

１．研究の目的

本稿の目的は、連体修飾節に任意に介在するトイウの談話語用論的な役割を、連体修飾節の修飾部(注1)と前後の文脈との関係を分析することによって明らかにすることである。

「外の関係」(寺村(1975) の用語による) の連体修飾節に介在するトイウについては、これまでも数々の研究がなされてきたが、その研究は大きく次の３つにわけられる。

一つめは、奥津(1974)、寺村(1977b) に代表されるように、トイウがどのような修飾節に介在するかを主眼としたものである。奥津・寺村論文と時期を同じくして、日本語の連体修飾節に関するすぐれた成果が次々と発表された。連体修飾節が修飾部の述部と底の名詞との統語的な関係の有無から「内の関係」と「外の関係」に区別されること、さらに外の関係の連体修飾節も、修飾部と底の名詞の意味関係やトイウの介在からいくつかに分類されることなどの成果は、現在の連体修飾節研究の基礎となっている。この中でトイウについては、主に、底の名詞の意味特性と修飾部の述部のモダリティの度合いから介在の可否が決まることが指摘された。

その後、話し手はトイウがある節の修飾部で表された内容を「どのように捉えているか」という問題が論じられた。トイウがある修飾節とトイウがない修飾節では、修飾部の内容の捉え方が異なるという考えである。戸村(1985)は、トイウのある修飾節では修飾部の内容を「抽象的な観念」として捉える、また中畠(1990) は「評価の対象」として捉えると述べた。大島(1991) は、トイウを介在する修飾節では「表現形式」が意識されている、すなわち当該の内容を修飾部の形で「表現してみるとどうなるか」と意識したときにトイウが介在するという説を述べた。

そして、益岡(1997)は、談話において修飾部がどのような情報価値を持つかという視点からトイウを考察する。本稿もこの視点に立つものである。益岡（同論文）は次のように言及した。

（１）　トイウ内容節（守時注：トイウが介在する連体修飾節）の表現は、内容節の部分（守時注：本稿の修飾部に相当）が情報の中心であると考えられる。内容節の方に情報上の重心があるということである。したがって、トイウ内容節の表現が使えるのは、内容節そのものが問題にされる場合、すなわち、内容節に対する言及が必要となる場合である、ということになる。(36ページ)

益岡は、トイウが介在する修飾節は、修飾部の内容に「情報上の重心がある」と考える。そして、「トイウ内容節の方が基本型内容節(守時注：トイウの介在が可能にも関わらず介在していない修飾節) よりも、内容節が表す情報の重要度が高いということを意味する(37ページ)」と述べる。益岡は、トイウが介在する連体修飾節を談話において考察することの必要性を指摘したのである。

益岡の言及は、さまざまな用例から直感的に納得できるものであるが、「情報上の重心がある」のが実際にどのような場合であるのか、実証的な研究が行われていない。修飾部で表す内容が重要かどうかを考えるためには、前後の文脈と照らし合わせて、修飾部がどのような情報価値を持っているかを分析する必要があるだろう。さらに、トイウが介在しない修飾節では「内容節に対する言及が必要と」ならないのだろうか。そうではなく「情報の重要度」が、トイウが介在する修飾節と比べて相対的に低いだけではないだろうか。すると、トイウが介在しない修飾節も前後の文脈の中で考察して、トイウが介在する修飾節の場合と比較する必要がある。

では、なぜトイウを考察するために、修飾部で述べる内容の談話における価値を考えなければならないか。この疑問に答えるために、次の例を見てみよう。

(2)　「パブロフのイヌ」の実験で五〇〇ヘルツの発振音を使った場合、その音があたえられるだけで唾液が分泌するようになりますが、そこで、たとえば一〇〇〇ヘルツの音をあたえても唾液が分泌します。

場合によっては、光刺激が加わっても唾液が分泌します。このような現象を汎化とよんでいます。反応が広がるトイウ意味です。　『記憶』

(3)　既に川崎製鉄は来年一月から原則全社員を対象に一ヵ月に二日間程度実施する φ 方針を決めており、他社も追随する φ 見込み。一時帰休実施は一九八六年から八七年にかけての円高不況以来のこと。(注2)　『北日本』

(2)(3)も、修飾部と底の名詞を見た限りでは、トイウの介在は任意である。しかし、上の例(2)ではトイウが使われ、例(3)の二つの修飾節ではトイウが使われていない。(2)の文脈において話し手(注3)はトイウが必要だと考え、(3)の文脈においてはトイウは不必要だと考えたということである。

ここで修飾部と前後の文脈の関係を見ると、(2)の「反応が広がる」は前文の「汎化」という語句を受け、その説明をしている。一方(3)は、修飾部の内容を単に一つ一つ提示しているようで、(2)のように先行文脈を説明しているわけではないようだ。トイウの介在は、修飾部と文脈の関係に左右されているようである。

そこで本稿では、まず、修飾部と前後の文脈との関係を分析して、トイウ節の修飾部がどのような情報価値を持つかを考察する。そして、トイウ φ 節の修飾部と文脈との関係と比較することにより、トイウの談話語用論的な働きを明らかにすることを試みる。

2．分析の範囲

本稿で考察する修飾節の範囲は、トイウの介在が任意の連体修飾節とする。トイウが

どのような文脈において使用されているかを分析するので、トイウの介在が修飾部と底の名詞の関係において決定する修飾節は考察の範囲としない。

寺村(1977b)によると、外の関係の連体修飾節は、トイウを必須とするもの、任意とするもの、介在が不可能であるものの三種に区分できる。トイウが必須である修飾節は、底の名詞が「言葉」「文句」「返事」など発話に関する名詞、または「思い」「考え」「想像」など思考に関する名詞で、修飾部でその内容を述べる場合である。「お父さんは待っているトイウ言葉」「うちの子供だけはしっかりしているトイウ思い込み」などは、トイウの介在が必須である。

トイウを介在することができない修飾節は、さらに二つのタイプに分けられる。まずは、底の名詞が「姿」「形」「匂い」など感覚に関する名詞で、修飾部でその内容を述べるタイプである。「畑で一生懸命働く姿」は、底の名詞の前にトイウを介在することができない。もう一つのタイプは、修飾部で底の名詞の「相対的な概念」を表す場合である。「A社が倒産した結果、二千人もの従業員が失業した。」では、修飾部「A社が倒産した」は「結果」ではなく、それに相対する概念「原因」の内容を表している。「結果」の内容は後続の「二千人もの従業員が失業した」という部分である。この修飾節では、修飾部と底の名詞の示す内容が異なるためにトイウを介在することができない。

そして、トイウの介在が任意の修飾節は、底の名詞が「コト」を表す名詞で、修飾部でその内容を述べるものである。「コト」を表す名詞というのは、「事実」「事件」「風習」「建前」のように、その指示内容を文の形で表現することができるものである。下の例(4)(5)は、底の名詞「事実」「結果」の内容を修飾部で述べる。

(4) この時、一般の市民がまきこまれて負傷するトイウ事件が偶発した。(＝寺村(1977b)(46))

(5) コメディやメロドラマ、ホームドラマなどよりもスリラー・ドラマの方が女性に受けているトイウ結果が出たというのである。(＝寺村(1977b)(46))

しかし、基本的にトイウの介在が任意である修飾節でも、修飾部の述部にモダリティ表現がついたり、述部が「だ」「である」などで終わる場合はトイウの介在が必須になる。

(6) 日光廟のような形式を否定し、その否定を様式として作り出すような人々がここにいたのだトイウ/*φ 印象 『桂離宮』

(7) できるだけ技能ないし能力によって運を克服しようトイウ/*φ 試み 『パチンコ』

(8) 相互理解のためには、論理的な言葉は重要でないし、むしろ邪魔だトイウ/*φ 気持 『日本人』

(9) 対人関係のあり方が問題であるトイウ/*φ 点 『まなざし』

したがって本稿で考察する対象は、底の名詞が「コト」を表し、修飾部でその内容を表現し、かつ修飾部の述部の統語的な条件からトイウが必須にならない(4)や(5)のような修飾節である。本稿では、この修飾節を「トイウ節」と呼び、トイウ介在の可能性があるにもかかわらずトイウがない修飾節を「トイウφ節」と呼ぶことにする。

3．談話におけるさまざまなトイウ節

前出の(2)(3)の例でみたように、トイウ節ではトイウφ節とは異なり、修飾部が前後の文脈との関わりを持つようだ。この節ではトイウ節の修飾部の内容が、談話において前後の文脈とどのような関係を持っているかを分析する。

3.1. トイウと文脈

収集したデータに基づくと、修飾部と文脈との関係は、大きく3つのグループに分けられる。

まず第一のグループは、既に先行文脈で言及されたある語句やことがらなどについて修飾部で説明をするものである。説明の仕方は、具体的な例を挙げたり、特性や特徴を述べたりする方法がある。

第二のグループは、修飾部の内容が前後の文脈や一般的な知識と対立しているものである。対立の仕方によって、修飾部の内容が否定、対比、限定、累加のフォーカスになる。

第三のグループは、修飾部で表わされる内容が談話の中で話題やテーマの展開と関わってくるものである。新しく内容を提示したり、既に叙述された内容を再び提示するものがある。また、結論を述べたり、話し手が強調したい内容を叙述するものもある。修飾部の内容は、先行文脈を引き継いだり、後続文脈へ受け渡したりすることが多い。

(10)に分析の結果得られた修飾部と文脈との関係一覧を提示する。これは約330例の修飾節を分析した結果であって、修飾部と文脈との関係を全て網羅しているわけではない。

(10)　トイウ節の修飾部と文脈との関係

- a　語句の説明をしているもの
  - a-1　例示
  - a-2　特性・特徴の叙述
- b　修飾部が前後の文脈や一般的知識と対立しているもの
  - b-1　否定のフォーカス
  - b-2　対比のフォーカス
  - b-3　限定のフォーカス
  - b-4　累加のフォーカス
- c　談話における展開に関わるもの
  - c-1　新しく談話に出てきた内容
  - c-2　再び談話に出てきた内容
  - c-3　結論を述べるもの
  - c-4　強調したい内容

以下、それぞれのタイプについて、具体例を見ていく。

a　語句の説明をしているもの

既に言及された語句やことがらを、修飾部で説明するタイプである。聞き手が知らないだろうと推測される語句や表現を正確に理解させるために説明する。

a-1　例示

語句やことがらを、修飾部で具体的な例をあげて説明する。

(11)　日本の破壊は、それ（守時注：古代ヨーロッパの侵略戦争における破壊行為）とは少し違うものをもっているようである。古いものをさっぱりと切り捨てて、払拭し去るということ、たとえば、一年間神棚にまつったお飾りのようなものを、正月の松の内が明けると焼いて、新しいものと取りかえるトイウ感覚に似ているように思う。　『たべもの』

修飾部は、先行文脈「古いものをさっぱりと切り捨てて払拭し去る」ことの具体例である。

a-2　特性・特徴の説明

語句やことがらを、その特性や特徴を叙述することによって説明する。

(2)　このような現象を汎化とよんでいます。反応が広がるトイウ意味です。(再掲)

(12)　慶長十四年に起こった宮女事件では、まだその隙が出来たというほどにはならなかった。これは宮中の女官五人が数人の公家衆と密通したトイウ事件なのであるが、それによって幕府はまだ宮中の風紀紊乱の攻撃には乗り出していない。　『桂離宮』

例(2)の修飾部は「汎化」という言葉の定義を述べる。例(12)の修飾部は、同文中の指示語「これ」すなわち「慶長十四年に起こった宮女事件」について説明する。「慶長十四年に起こった宮女事件」は、談話中、ここで初めて出てきた言葉で、修飾部で事件の概要を述べている。(注4)

b　談話や一般的知識と対立しているもの

このタイプは、修飾部の内容が談話で言及されている内容や一般的な知識と対立しているものである。否定、対比、限定、累加の順に例を見る。

b-1　否定のフォーカス

修飾部の内容が否定されているものである。

(13)　もしそうだとすれば、日記に用いられている「普請スル」という文句は、この日に茶屋の建築を始めたトイウ意味ではなく、すでにある茶屋の改造か手入れか、とにかく五日とか十日とかでできる程度の軽い普請であったであろうと解することが出来る。　『桂離宮』

b-2　対比のフォーカス

修飾部の内容Aが内容Bと対比しているものである。

(14)　のちにのべるように、視線恐怖症の人がもっとも避けたがるのは、A舞台に立って観客を前にするトイウ状況よりも、むしろ、Bより小さなグループに参加するト

イウ状況においてなのである。　『まなざし』

例(14)は対比するＡＢの両方が修飾部で表されているが、必ずしもその必要はない。

b-3　限定のフォーカス

修飾部で表現されている内容が、限定された部分を表すものである。前後の文脈や一般的な知識から「部分」が属する全体集合を推測することが可能である。

(15)　この棲みわけは、十九世紀後半のドイツの生物学者、ワーグナーの隔離説によく似ている。ワーグナーの隔離説というのは、同じ種に属する生物が決して越えることのできないような地形的な障壁によって、二つのグループに分離されたときに、新しい種ができてくるという考えである。

しかし、棲みわけと隔離説の間には、大きな違いがある。確かに、$_{A}$二つの近似した種の間に何らかの境があるトイウ点までは同じである。ワーグナーは、$_{B}$この二つの近似した種の間に山や海といった絶対に乗り越えられない障壁があるために、グループ同士の交配ができなくなり、二つの種に分かれると考える。

ところが、棲みわけでは、$_{C}$二つの近似した種の間に境があっても、隣り同士で一緒に生息していてもいいのである。　『進化論』

例(15)は、今西錦司の「棲みわけ」とワーグナーの「隔離説」を比べて、その共通点と相違点を述べている部分である。まずＡ「二つのよく似た種の間には物理的な境界がある」は、二つの理論の共通点を述べる。次に相違点だが、ワーグナーの「隔離説」ではＢ「その境界があるために交わることができなくなり、種として分化する」と考えるのに対し、今西の「棲みわけ」では、Ｃ「異種が場所や繁殖時期などをずらしながら共存している」と述べる。二つの理論は、いろいろな考えＡＢＣ（全体）のうちＡ（部分）だけを共通して持つ。このＡがトイウ節の修飾部で表されている。もう一つの例を見よう。

(16)　ところで、「梅干し」ということばを聞いたり読んだりすると、口の中に唾液が分泌されます。餌と組み合わされた音を聞いたときと、同じような反応が起こるわけです。「梅干し」ということばは、実際の梅干しにつけられた符号であり、実際の梅干しと共にあるトイウ意味では餌と組み合わされた音と同じ存在ということになります。そこで、パブロフは、ことばを第二信号系とよびました。

『記憶』

例(16)は、パブロフの有名な実験（習慣を持つ犬は、音を聞いただけで餌がなくても唾液が出るようになるという実験）について述べたあと、ことばも反応の刺激となりうることを述べた部分である。この文脈には「全体」が叙述されていないが、一般的な知識から推測することができる。「梅干し」と「音」が持つ性質として考えられるのは、「梅干し」は意味を持った単語で、指示対象があり、食べられるが、「音」はそれ自体では意味を持たず、食べられない、などである。相違点ばかりが浮かぶが、そのような全ての中で符号と実態が結びついているという性質は共通に持つ。この修飾部の内容が「部分」である。一般的な知識から「全体」が推論できる例を見た。

b-4　修飾部の内容を累加して述べるトイウ節

修飾部の内容が、何かに付け加えて述べられているものである。

(17)　日本は、八時間の労働の間はアメリカみたいに締めつけられないが、二十四時間中、会社員たることから逃れられない。それが可能なためには、終身雇用や年功序列にもよるが、公私混合が許されているトイウ条件も大きく働いているのだ。

『日本人』

例(17)では、日本の労働者が一日二十四時間会社員であることを可能にしている要因を考えている部分である。「終身雇用」や「年功序列」などの要素に加えて、修飾部「公私混合が許されている」という要因が挙げられている。

c　談話における展開に関わるもの

このタイプは、修飾部が話題やテーマの展開に関係しているとみられる例である。

c-1　新しく談話に出てきた内容

修飾部で新しい内容を提出し、それが後続の談話へ続いていくものである。

(18)　視線恐怖は、洋の東西をとわず、わが国の文献以外にまったく記載がなかった。つまり、少なくとも今日までは、わが国以外の精神医学者や心理学者によって、注目されることがなかったのである。しかし、だからといってわたしたちは、視線恐怖に類する現象は外国には皆無である、などと急いで結論してはなるまい。

かつて土居健郎が、「甘え」を一つのカギ概念（a key-concept）として日本の文化を論じたとき、甘えに相当することばが西洋語にはみられないトイウ事実の発見が、着想の出発点となっていたようにおもう。そしてその際、土居自身も注意ぶかくことわっていたように、西洋に「甘え」に相当することば（単語）がないからといって、かれらのあいだには、「甘え」という現象が皆無であるということではけっしてなかった。

『まなざし』

例(18)は 土居健郎の「甘え」の概念について述べ始めたところである。話し手は「甘えに相当することばが西洋語には見られない」という内容を導入し、以下「甘え」ということばと現象をめぐる叙述が続く。

c-2　再び談話に出てきた内容

先行文脈で一度提示された内容が、修飾部で再び提示されものである。

(19)　西洋の自然科学の原理の一つに、連続的な因果律という概念がある。進化も連続的な因果律で説明できるようになったときに、はじめて科学の仲間入りをした。ダーウィンは、進化を連続的な因果律で説明することに成功した偉大な科学者である。ダーウィンによって、進化は自然科学の箱の中に収められたのである。

連続的な因果律というのは、…（この段落2文）

近代科学は自然を機械とみなし、…（この段落2文）

決定論では、…（この段落3文）

こうしたことから、微積分は、…（この段落2文）

ラプラスは、…（この段落5文）

微積分というのは、ある物体が無限に小さな時間に無限に小さな距離だけ進むといった無限小の量を基本とした原理である。そのため、微積分は連続性の概念ともいわれる。微分方程式に支えられた近代科学は、あらゆる自然現象を連続したものとみる体系である。（守時注：進化の）枝分かれの所で何が起きたか？

ダーウィン進化論も、自然を連続的にみるトイウ立場をとった。ダーウィンフィンチの例でも、進化の系統樹が登場する。ダーウィンフィンチの進化の系統樹をみると、南米大陸からやってきた祖先から今日までの変化が一目でわかる。進化を系統樹として整理することは、長い間の変化をみるには、とても便利な方法である。『進化論』

修飾部「自然を連続的に見る」というのは、20文前に言及された点線部「ダーウィンは、進化を連続的な因果律で説明することに成功した偉大な科学者である」を受けている。途中、連続的な因果律を支えた近代化学の自然観や決定論、微積分などの理論の紹介があり、再び自然を連続的に見ることについての議論に戻る。聞き手はここで、先のダーウィン進化論についての叙述を思い出すわけである。そして続く文脈で、「自然を連続的に見る」ことに関連する叙述が続く。

c-3　結論を述べるもの

修飾部が先行文脈を引き継ぎ、推論を経て導き出された内容を表す。底の名詞は「結論」「結果」などが多い。

(20)　しかし、拾集や純粋農耕の共同動作の世界ではそんな必要はない。ここで生まれた言葉は、いたわりや、ねぎらい、はげまし、同情といった狩りには不必要で有害な、情意の交換用のものとなる。

日本語が感情の伝達ではたいへん複雑微妙な点までも表現できるようになっていながら、意志の正確な交換には案外不適当だというのは、このようなところに原因があるのではなかろうか。とするならば、究極的な相互理解には「口ほどにものをいう目」の方がうまく行くという考え方が当然生まれて来るトイウ結論になるはずである。『日本人』

例(20)では、先行文脈で日本が農耕社会だったこと、農耕社会では情意的な言葉が必要であることを述べ、そこから推論して修飾部「相互理解のためには言語以外の手段の方が貢献しただろう」と述べる。

(21)　だが、意志の正確な伝達は言葉以外にはない。それに一つの家庭のいろいろの約束事は特殊な個性的なものである。生活水準と生活様式が細分化して、社会構成が複雑になってくると、それが通用するのは家の内部でだけということになろう。こうして日本人は共通の広場で発言する能力に著しく欠けているトイウ結果が生まれるのである。『日本人』

例(21)は、先行文脈で、家庭内では言語によって意志を伝える必要がなかったという日本の家族社会の一側面を述べる。この側面と「日本人は公衆の前で発言する能力に欠け

ている」という現象とを、「原因―結果」の関係で捉えて提示している。

c-4　強調したい内容

修飾部で話し手が強調する内容を述べるものである。

(22)　しかし、重要なことは、集団の機能が強くなればなるほど、その方向に人間関係が構築されていくトイウ構造を内包しているということである。筆者のみるところ、日本のあらゆる社会集団に、この共通した構造(人間関係設定の基本原理)が潜在していると思われるのである。　『タテ社会』

(23)　わたしの指摘したいのは、その場合、日本のタテの関係、上役、部下の関係は、ヨーロッパ、アメリカのように一つではないトイウ点である。みごとに表のタテの関係と裏のタテの関係が両立している。　『日本人』

上の二例では、それぞれ「重要なことは」「わたしの指摘したいのは」という句からも推測できるように、修飾部は話し手の主張したいこと、強調したいことを表している。先行の文脈をまとめたり、後続文脈で修飾部の内容に関することが引き続き叙述される例が多い。

以上、トイウ節の修飾部と前後の文脈とのいろいろな関係を見た。a は語句やことがらを説明するタイプ、b は修飾部の内容が対立しているタイプ、c は談話における展開に関わってくるようなタイプであった。

このように見ると、修飾部の内容は、話し手が伝達したいことそのものだったり、伝達することを正確にかつ効果的に聞き手に理解させるための叙述のようである。語句やことがらの説明は、聞き手にとって新しい（と話し手が推測する）内容を提示する。新しい概念の導入である。修飾部の内容を他と対立することは、特徴を浮き彫りにすることとも言える。この過程を通して、聞き手は対象となる内容をよりはっきりと理解することができる。また、談話における展開に関わる内容は、談話の骨格とも言うべきものである。背景的となる情報などと比べると、話題やテーマ、話し手の主張に関わる内容は、談話において大切なものである。

談話において話し手が考えるのは、聞き手に、何をどう伝えるかということだろう。話し手が伝達することは、聞き手に正確に理解されるのが望ましい。そして、聞き手に正確に理解してもらうためには、話し手は効果的に提示することも必要である。トイウ節は、談話において展開に関わる重要な内容を表したり、正確な理解と効果的な提示のために貢献している。益岡(1997)の「重要度が高い」というのは、この点を指摘したものと推測する。

4．談話におけるトイウ φ 節

トイウ節では、修飾部と前後の談話との間にいろいろな関係が成立していたが、トイウ φ 節では談話において a～c のような関係が見えにくいようである。下のトイウ φ 節の例を見よう。

(24)　（章始め）日本の国よりも、個人的利益や党派利益をまず考えるという心優しい政治のおかげで、私有財産の公共性などは一顧も与えられないが、原点にたちかえる φ 意味で、日本国憲法の基本となった、いわゆるマッカーサー草案の財産権関連条項を引用してみたい。

第二七条　財産ヲ所有スル権利ハ不可侵ナリ然レトモ財産権ハ公共ノ福祉ニ従ヒ法律ニ依り定義セラルヘシ　『法感覚』

(25)　（章始め）ソ連という国は、いろいろカーテンがかかっていて、この国の人々がどんな生活をしているか、なかなか見通しがきかない。かつてキエフで国際老年学会が開かれた折など、この国を訪れる φ 機会があって、私はターミナル・ケア対策をどのようにやっているか見せてもらえるという学会長の約束をとりつけ、大いに期待して出かけたこともあったが、結局見せてもらえなかった。

『高齢化』

上の例の修飾部「原点にたちかえる」「この国を訪れる」は、語句の説明をしたり、何かと対立しているわけではない。また、展開に関わる内容を示してもいない。むしろ、これから述べることの背景となる情報を提示しているようである。また、先に見たが、

（3）　既に川崎製鉄は来年一月から原則全社員を対象に一ヵ月に二日間程度実施する φ 方針を決めており、他社も追随する φ 見込み。一時帰休実施は一九八六年から八七年にかけての円高不況以来のこと。　（再掲）

この例では、修飾部の内容を平板的に列挙しているだけのようである。

もちろん、トイウ φ 節の中には、修飾部と文脈とが関係していると思われるものも多くある。たとえば、例(26)の修飾部は「マウンティング」という言葉の定義を述べている。

(26)　（サルが）二頭が出会うと親和的な親しみがその場で形成されます。けんかをすることはまずありません。ふつうマウンティングという行動が起こります。これは強い方が弱い方の尻に乗る φ 行動なんですが、二頭の場合には弱い方が強い方に乗るというのがしょっちゅうおこるんです。強い方が弱い方に乗ることもあって、別に法則がないんですね。　『まなざし』

ここにはなぜトイウがないのだろう。それは、修飾部の内容の「重要度」が、相対的に低くなったからと考えることができる。(26)は修飾部で「マウンティング」という言葉について定義を述べているが、話し手は後続文脈「二頭の場合には弱いサルが強いサルの尻に乗ることもある」ことも伝えたがっている。マウンティングについての定義よりも、サルが二頭の場合はその定義に反することが実際あり得るということを言いたがっているようである。修飾部の内容よりも、より伝えたい内容があり、相対的に修飾部の内容の重点が低くなったと考えられる。

5．トイウの役割

これまで、トイウ節とトイウ φ 節の修飾部と前後文脈との関係を見てきた。トイウ節

は、修飾部で重要な内容を提示するときに使われる。一方のトイウ φ 節は、談話において背景となる内容を提示したり、単に内容を列挙するときに使われている。

以上の観察より、トイウの談話における役割は次のように規定することができる。

(27)　トイウは修飾部への注意を促すマーカーである。

トイウは、修飾部で大切なことを述べているから注目するように、という標識である。話し手は修飾部の内容に注意して読むことを聞き手に求める。これを受けて聞き手は修飾部で述べられた内容に注意し、前後の文脈との関係をさまざまに解釈しながら理解するのである。

6．トイウの介在と話し手の意図

最後に、トイウ介在の任意性について考えてみよう。トイウが任意に介在する連体修飾節は、談話に組み込まれる段階で、修飾部の内容に注目すべきか否かが判断される。修飾部の内容は大切だから注意してもらいたいと考えるのは話し手であり、この話し手の意向がトイウの介在を最終的に決定する。

さらに、話し手は、トイウが持つ役割を修辞的に利用して修飾節にトイウを介在し、修飾部に注意を呼びかけることもできる。また、トイウを使わないことによって、修飾部への注目を呼びかけず、修飾部の内容を単に並べて提示することも可能である。事件やニュースなどを報道する新聞記事は、後者の典型例である。例(3)の全文を見てみよう。

(28)　鉄鋼各社　一時帰休実施へ

新日本製鉄など鉄鋼大手各社は、鉄鋼不況深刻化への対策として、近く一時帰休を実施する φ 意向を固め、具体的な検討に入った。既に川崎製鉄は来年一月から原則全社員を対象に一ヵ月に二日間程度実施する φ 方針を決めており、他社も追随する φ 見込み。一時帰休実施は一九八六年から八七年にかけての円高不況以来のこと。［7面に関連記事］

一時帰休は政府から雇用調整助成金の支給を受けるための措置で、鉄鋼各社は昨年十月、同助成金を受けられる指定業種となっていた。

しかし円高不況の際の一時帰休は事業所や工場など製造現場が対象だったが、今回は各社とも本社を含めた全社員が対象になるとみられ、本格的な雇用調整にまで手を付けざるを得ない φ 鋼材不況の深刻さを浮き彫りにした。

鉄鋼業界は長引く不況による自動車、電機など大口需要家の業績不振や円高、それに九三年度前半は好調だった中国向け輸出がここにきて頭打ちになるなどの要因で、収益力が急速に悪化している。

川鉄の場合、九三年九月中間決算は売上高五千三百億円に対し経常損益は八十億円の赤字を予想、通期でも経常赤字を解消できない φ 見通しだ。　『北日本』

どの連体修飾節の修飾部も、談話で新しく提示する内容を述べていると見ることができる。しかし話し手は修飾部の内容への注意を呼びかけず、内容を一つ一つ提示するのみである。聞き手にとっては、コトが列挙されただけの無機的な文章という気がする。も

ちろん、通常、新聞の社会面には記者の考えや気持ちなどは述べられないので、この記事でトイウが使われていないのは妥当なのである。実際に、新聞の他の記事、たとえば読者の投書欄や家庭欄、社説などは、社会面や政治面よりもトイウの出現が多いようである。

7．まとめと今後の問題

本稿では、修飾部と談話との関係からトイウが持つ役割を考察した。トイウの談話における役割を再掲する。

(27) トイウは修飾部への注意を促すマーカーである。

修飾部が談話の中で注目に値する内容を述べていると判断される修飾節では、トイウを介在し修飾部への注意を促す。また、このトイウの役割を修辞的に利用すると、話し手は聞き手に修飾部に注意するよう呼びかけることが可能となる。

本稿は、トイウ節の修飾部と談話とのつながりからトイウを分析したが、トイウに限らず談話において修飾節を考察することは、修飾節の研究に新しい視点を与えるものと考える。談話中、修飾部がどのような情報価値を持つか、この視点は連体修飾節の働きや、談話の構成に修飾節がどのように貢献しているかを分析する手がかりになるだろう。

この分析では、トイウ節の修飾部と前後の文脈とのさまざまな関係を概観するにとどまったが、文脈のつながりを数量的に調査することもトイウの介在を明らかにする一つの方法である。また、今回は触れることができなかったが、トイウの介在は単文においても特徴がある。特徴のある構文でトイウが使われたり、主文の述部との関係でトイウが使われやすいという傾向が見られる。残された問題は多々あるが、今後の課題としたい。

本稿の執筆にあたり、筑波大学の砂川有里子先生、リュブリャーナ大学のアンドレイ・ベケシュ先生に貴重なご意見と温かい励ましをいただきました。ここに誌して深く感謝いたします。

(注1) 本論では、名詞を修飾する部分を「修飾部」と呼び、修飾される名詞句を「底の名詞」と呼ぶ。次の修飾節で、修飾部は「94年のワインはよく売れた」、底の名詞は「事情」である。

(1) 94年のワインはよく売れたトイウ事情

(注2) 「ϕ」は、その位置にトイウがないという意味の記号として用いる。

(注3) 本稿の例は全て書かれた資料からの引用だが、表現の発信者を「話し手」、受信者を「聞き手」とする。

(注4) 次のように、底の名詞に対して更に修飾句がついた修飾節(1)や、底の名詞が専門的な用語で修飾部でその定義を述べる修飾節(2)も、a-2の一例と考えられるだろう。

(1) してみると、睡眠か睡眠でないかの議論は別として、休息すべきときに活動させられると、かならずその埋めあわせをする、トイウ調節のしくみは、下等動物にもちゃんと存在していることになる。 『睡眠』

(2) ゴムルカ政権の登場によってコルホーズはほとんど廃止され、代わったギエレク（一九一三一）政権のもとで、目下、静かな、だが驚くほど大胆な農業改革が行なわれている。つまり、農民が生産高を増せば増すほど、結果が収入増となって農民のふところに返る、

トイウ「利潤方式」の採用であり、ソ連や他の東欧諸国には例がない。　『二十世紀』

【参考文献】

大島資生　1989「『命題補充の連体修飾節構造』について」『日本語研究』11　東京都立大学人文学部国語学研究室

1991「連体修飾節に現れる『という』の機能について」『人文学報』225　東京都立大学人文学部

奥津敬一郎　1974『生成文法論』大修館書店

寺村秀夫　1975「連体修飾のシンタクスと意味―その1―」『日本語・日本文化』4　大阪外国語大学留学生別科

1977a「連体修飾のシンタクスと意味―その2―」『日本語・日本文化』5　大阪外国語大学留学生別科

1977b「連体修飾のシンタクスと意味―その3―」『日本語・日本文化』6　大阪外国語大学留学生別科

1978「連体修飾のシンタクスと意味―その4―」『日本語・日本文化』7　大阪外国語大学留学生別科

戸村佳代　1985「日本語の連体修飾節構造と『トイウ』の機能」　筑波大学地域研究科修士論文

中畠孝幸　1990「『という』の機能について」『阪大日本語研究』2　大阪大学文学部日本学科

益岡隆志　1997『新日本語文法選書2　複文』　くろしお出版

【用例の出典】

『桂離宮―様式の背後を探る』　和辻哲郎著　中公文庫　1991年

日本語教育支援システム研究会作成　CASTEL/J より

『タテ社会』=『タテ社会の人間関係』　中根千枝著　講談社　1967年

『日本人』=『日本人の意識構造』　会田雄次著　講談社　1972年

『二十世紀』=『二十世紀の世界』　今津晃著　講談社　1974年

『たべもの』=『たべものと日本人』　河野知美著　講談社　1974年

『高齢化』=『高齢化社会』　吉田寿三郎著　講談社　1981年

『まなざし』=『まなざしの人間関係』　井上忠司著　講談社　1982年

『パチンコ』=『パチンコと日本人』　加藤秀俊著　講談社　1984年

『睡眠』=『睡眠の不思議』　井上昌次郎著　講談社1988年

『法感覚』=『日本人の法感覚』　中川剛著　講談社　1989年

『進化論』=『進化論が変わる』　中原英臣/佐川峻著　講談社ブルーバックス　1991年

『記憶』=『記憶の大脳生理学』　千葉康則著　講談社ブルーバックス　1991年

『北日本』=『北日本新聞』　1993年9月29日